

日本語における再帰性をもつ他動詞構文についての体系的な研究

李, 静

<https://doi.org/10.15017/2348715>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 李 静

論 文 名 : 日本語における再帰性をもつ他動詞構文についての体系的な研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

「再帰性」という概念は形態的標識を持っていない日本語にとっては捉えにくいものであると考えられる。「N-が N-を V-する」の形態的標識を見れば、他動性の概念や他動詞構文と一般には理解されている。しかしながら、他動詞構文の中では、他動性の高低によって、典型的な他動性構文と周縁的な他動詞構文に分けられている。他動詞構文の中では、「動作主からの働きかけが動作主自身に戻ってくる」という意味特徴をもつ構文が見られる。これらの「動作主からの働きかけが動作主自身に戻ってくる」の意味が「再帰性」と呼ばれている。日本語には、「着る」「脱ぐ」「浴びる」などの動詞自体が「再帰性」の意味を表す一方、動作対象が動作主自身あるいはその一部分である場合、動作主からの働きかけが結局動作主自身に変化を起こすという「再帰性」の意味を表すこともできる。

意味的には、「動作主からの働きかけが動作主自身に戻ってき、動作主自身に変化を引き起こす」という特徴を一般的に、自動詞構文と思われるが、形としては、他動詞構文である。このように他動詞構文と自動詞構文と跨っている用法と思える再帰性の研究はまだ不十分であると考えられる。再帰マーカータを持たない日本語に、再帰性の用法を意味的な側面から理解するしかないのである。

本博士論文では、認知言語学アプローチから日本語における再帰性をもつ他動詞構文を体系的に分析することを目的とする。

第1章では、他動性、再帰性の概念に注目し、本稿で扱う再帰性を改めて定義した。

再帰性とは、動作主から発する働きかけが自分自身あるいはその一部分に回帰し、動作対象の変化によって、動作主に状態変化を引き起こす概念である。

第2章はこれまで、意味論、統語論、プロトタイプ理論から「再帰性」、「再帰文の位置づけ」を論じた諸説を概況し、先行研究の問題点をまとめた上で、本研究の位置づけを行った。

第3章は、コーパスを利用し、従来再帰動詞と呼ばれる動詞の実態を考察した。「着る」「かぶる」「はく」「ぬぐ」「あびる」などの動詞は再帰性の意味しか持たないことを検証できた。「再帰動詞」と「着脱動詞」の共通点、相違点を明らかにし、「着脱動詞」という動詞の名称をつける必要がないメリットを解明した。

第4章では、「再帰性」を構成する意味要素<+意図><+自身><+行為><+変化><+求心的>を満たす度合いによって、「再帰性」をもつ他動詞構文の分類を試みた。「再帰動詞」を含める構文が一番高い「再帰性」を示した。「再帰動詞」の構文をプロトタイプの「再帰性」をもつ他動詞構文と規定し、他の再帰性を持つ他動詞構文を周縁的例として考えられる。

第5章では、病理・生理現象を表す他動詞文と再帰性の関連性を探ってみた。コーパスから生理現象名詞と動詞のコロケーションの実態を明らかにし、生理現象を表す述語動詞の使い分けの理由を説明した。病理・生理現象他動詞文の他動性の度合いが極めて低く、周縁的な他動詞構文と思われる。

病理・生理の状況が出ることは、有生物に限っている。病理・生理状況を叙述するとき、基本的に、

その当事者を中心とする。主体と客体は分離不可能な関係であるからこそ、客体に何らかの状態変化が起こることによって、主体に変化が生じる。客体の変化とともに主体に変化が起こるという意味特徴で、「再帰性」と繋がる。「再帰性」という意味特徴が内在されることで、構文レベルで、病理現象を表す構文は他動詞構文が適切である。

第6章では、介在性の他動詞文と呼ばれる「主語は動詞の示す行為の直接の主体ではなく、文中では出現していない他の第三者を介して行為を完成させる文」の成立条件、再帰性との関係を分析した。このような事象構造を表す日本語「ガ、ヲ」格構文が成立するための要因を明らかにした。

介在性の他動詞文にも幅があり、介在性の度合いによって、プロトタイプの用法と周辺的な用法が見られる。プロトタイプの介在性の他動詞文の特徴は「主体と客体の関係は譲渡不可能の関係で、主体が客体の自分自身に難易度高い動作を行うことが不可能」ということである。「客体に変化が生じたことによって、主体に変化が起こった」という点において、介在性の他動詞文は「再帰性」と関わり、再帰性をもつ他動詞構文の一種類と考える。

第7章では、再帰性をもつ他動詞構文の特徴を明らかにし、プロトタイプの再帰性をもつ他動詞構文から周辺的な再帰性をもつ他動詞構文への拡張プロセスを提示した。また、再帰性をもつ他動詞構文と他動詞構文との関連性を分析した。

最後に終章では、第1章から第7章まで得られた結論をまとめて、新規性と今後の課題を総括した。